

中学校国語科における論理的文章を 「読むこと」の授業研究

Lesson study on "reading" logical sentences in junior high school Japanese classrooms

長谷川 祥子／田邊 泰／西山 明人／加賀谷 いづみ
Sachiko HASEGAWA / Yasushi TANABE /
Akihito NISHIYAMA / Idumi KAGAYA

1 中・高等学校国語科の課題

令和6年度全国学力・学習状況調査の結果(概要)によると、中学校国語の「書くこと」は「表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるよう工夫することに課題がある」と分析されている。一方、「読むこと」では「目的に応じて必要な情報に着目して要約することに課題がある」と示されている。

両者の共通点は「目的に応じた内容になっていない解答が見られる」とされ、「必要な情報を取り出すことや、表現の効果を考え、説明すること」に課題があるとまとめられている。これらは中・高等学校国語科授業の課題を端的に示し、文学的文章と論理的文章との本質の理解が不十分であることが起因しているといえる。

2 研究の目的

本稿は、中学国語教科書の論理的文章を「読むこと」の授業について、新たな提案を目指すものである。前述の「1」で示した諸点の中から、論理的文章を「読むこと」で文章構成に気づくことのできる簡潔な学習指導の必要を痛感している。

3 研究の方法

研究の方法として、次の3点を設定している。

- (1) 国語科で育てる論理を確認する。
- (2) 中学3年の論理的文章教材を検討する。
- (3) 大学3、4年が作成した論理的文章教材の構成表から、課題等を考察する。

4 国語科で育てる論理とは

膨大な情報から有用な情報を的確に取り出し、それを判断し、言動に移すための思考力が益々必要となった。

(1) 国語科で論理を教えるのはなぜか

言葉は社会の中で生まれ、その歴史的变化とともに変容している。デュルケームによると言葉は「社会的事実」であり、「社会的事実」は外から個人に課せられるという(1)。これは、言葉が社会という枠組みの中で形成され、歴史的な諸事実によって変化していくことを示している。社会が封建社会であれば言葉も封建的色彩を帯び、近代化された社会であれば言葉も近代社会の要素を兼ね備えている。

17世紀はラテン語という一つの確立した演繹の体系から、母語が日常言語から国家の言語として次々に定着する過渡期である。田中克彦(1981)は「一定の資格づけを受けたことばは、たいていが国家のことばになっている」(2)とし、フランスでは中・近代、同一の言語による統一が行われ、一方言であったフランス語が「母のことば」となり、「国家の言語」へと発展したとしている。統一言語は市民階級が台頭する上で不可欠な存在であった。

母語が国家の言葉として定着する過程とは、論理的思考の形式が演繹論理の思考法から、帰納論理の思考法の必要が認識される時期と重なる。17世紀は科学革命の時期であると同時に、ヨーロッパでは各国の母語の成立期である。このことから、言葉とは社会共通に通用する論理そのものであり、それが国語科で論理を教える所以と捉えている。

(2) 言葉は論理といえるか

言葉による表現活動、理解活動は思考活動そのものである。そして、言語は各地域の社会、文化の歴史による独自の表現形式(音声・文字言語、表象言語、文化)を保持している。このことから言葉による表現活動、理解活動は各地域の社会、文化の活動であるといえることができる。言葉による思考活動とは全て論理的思考といえることができる。

ピアジェは言語と思考は「連帯的な構造」の中で絶えず相互作用を行いつつ、必然的に互いに依存し合うと述べている(3)。人々が一定の地域で共通の言語を使うとき、人々は意識無意識を問わず、共通の社会、文化に基づく一定の言語規則に従って思考し表現している。人々がこの言語規則に従って推論を述べようとしたとき、論理的思考、論理的表現が必要になる。

言葉が人々にとって共通の規則の枠組みをもっている記号であるからこそ、人々はお互いに予定を確認したり、行動を共にしたり、感動を共有したりすることができる。この社会共通の規則の枠組みを論理と呼ぶことができる。

学校教育では全教科を通して社会生活に必要な思考の枠組みを教えることが役割としてあり、このことは言葉と文字による論理的思考の技術を教えることだといえる換えることができる。国語科授業はその中核を担っている。

5 論文の形式

コンポジションに関するアメリカの教科書を森岡健二(1963)は検討し、文章の形式を「記述文」、「叙事文」、「説明文」、「論証文」(4)と分類した後、定義している。これらの定義をみると、文学的文章の要素も含まれ、文章の規範を文学作品に求めようとする考えが混在していると推測できる。さらに、森岡健二は一つの文章の中で、この四形式は文脈に応じて混じり合いながら用いられ、「今でも文章分類の原理として支配している」と述べ、「対象のとらえ方や人間の考え方に関連する基本的な分類原理を含んでいる」とした。しかしながら、これは各文種概念が確立していなかったことによる認識と考えられる。

(1) 科学論文の形式

科学論文は次のような一定の形式で書かれている(5)。

- ① 題名（結論の紹介）
- ② 序文（論文の概略・要点）
- ③ 研究方法（実験・調査等の具体的内容）
- ④ 結果（実験・調査結果の整理）
- ⑤ 考察（実験・調査結果の解釈）
- ⑥ 結論（考察の意義）

これら科学論文の内容の順序が論理的文章の書き方そのものになっている。このうち「④ 結果（実験・調査結果の整理）」から「⑤ 考察（実験・調査結果の解釈）」の関係が帰納論理の、自然科学の思考法を示している。

帰納論理の思考法とは複数の具体的事例によって、それまで未知だった一つの性質を推論する思考法である。自然科学は領域ごとに推論の方法を研究し、精密に測定したり、具体的事例を豊富に獲得したりして、大きな成果を上げている。

この推論の方法を論理的文章の形式に応用し、組み立てると、初歩的な推論法を示す文章形式になると捉えている。

(2) 「アメリカ式」と「フランス式」の論文

論文について、小熊英二（2022）は「アメリカ式」と「フランス式」とに分け、説明している。アメリカで「ハンバーガー・エッセイ」や「パラグラフ・ライティング」(6)が広がったのは1960年代からで、その背景には中等・高等教育の進学率の急激な上昇や、様々な出自をもつ学生等に一定の形式を教える必要が高まり、「評価基準を明快にする必要」があったという。

現代アメリカでは「序論・本論・結論から成る『エッセイ』」の形式として教えられ、「①自分の主張を述べ、②論拠を示して論証し、③自分の主張の妥当性を確認する、ということを行う」形式といい、これは「役割をもった『パラグラフ』から構成」されとしている。この「アメリカ式」の論文は、科学論文の形式を援用し、帰納論理の思考法によって文章が展開すると理解している。

さらに、小熊英二は「フランス式」の論文は「弁証法にもとづいた論文dissertationの書き方」

を教え、「対立する見解を示しながらそれらを止揚して、そのどちらとも異なる見解を出す展開」が求められると述べている。

同様のことを、渡邊雅子(2021)は詳しく説明し、ディセルタシオンとは「三部構造を取るが、その中身は〈正-反-合〉の弁証法を基本構造にしている」(7)という。「展開部分では、先の三つの問いに答えながら、主題に対するある見方(〈正〉)、次にそれとは相反する見方(〈反〉)を示し、これら二つを統合する第三の見方(〈合〉)を提示し論証する」としている。

続けて、渡邊雅子は「エッセイは科学的なデータや個人的な体験、歴史的な事実などの『経験知』が主たる根拠となる。それに対して、ディセルタシオンでは、著名な哲学者や作家による『作品の厳密な引用』のみが根拠となる。これはエッセイが自然科学の仮説検証の論証方法をモデルにしているのに対して、ディセルタシオンが人文学、とりわけ哲学の論証方法をモデルにしていることに由来する」と述べている。

中・高等学校の国語教科書の論理的文章教材を調べたところ、科学論文の形式を援用した文章と、演繹論理の思考法による文章が多くを占めている。「ことばとことばの関係」を扱い、「前提と結論の関係を、その関係だけを、論理は扱う」(8)という説明が、演繹論理の性質をよく示している。演繹論理の思考法による文章は一文一文が命題になり、その命題がつながるため、抽象的な内容が続く、具体的事例がほとんど現れない。ディセルタシオンは演繹論理の思考法による文章が素地となっており、両者は深く関わっていると推測している。

6 論文の形式

2017年9月28日の「モノづくりを担う人材」(朝日新聞日刊「経済気象台」)という記事は一つの形式段落に主要語句が明確に存在し、それをキーワードで取り出すことのできる文章である。各段落の役割とキーワードは以下のとおりである。

形式段落	段落の役割	キーワード
1	概要	感心した出来事
2	具体的事例1	あるイベント
3	具体的事例2	先生の協力
4	共通する性質	モノづくりを担う人材の育成
5	主張	教育のあり方を再検討

本記事の第1、2形式段落は次のとおりである(下線は稿者により、キーワードを示す)。

最近、感心した出来事を一つ紹介したい。

休日に開かれた、あるイベントのことだ。工業系の高校生がブースでちょっとした小物を作り、子どもに作り方を教え、プレゼントしていた。教える高校生も教わる子どもも、目が生き生きとしていた。また、別の高校生は壇上にあがり、学校で何を学んでいるかを観客に説明していた。技能五輪全国大会に出場する生徒もいた。

〔考察〕① 「モノづくりを担う人材」は700字程度の文章で、一段落一事項の原則を備えている。

各段落が序論、具体的事例、考察、結論という役割を担っている。

② 引用した事例ではイベントでの出来事が具体的に易しく説明されている。序論と「教育のあり方を再検討」という主張とは首尾一貫し、さらに、具体と抽象的概念とに差がある書き方となっている。

7 中学3年の論理的文章教材の特徴や文章構成

令和3年度の中学3年国語教科書の論理的文章教材を、科学論文の形式を備えているかという観点によって、その特徴や文章構成を考察する。

(1) 東京書籍

① 「絶滅の意味」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2・3・4」「まとめ」という構成の「報告」の文章である。

イ 「なか1」「なか3」には一段落に一項目ずつ、絶滅の事実や生態系の恩恵の詳細な説明と、それらに共通する性質が書かれ、具体と抽象的概念の関係が明確である。

ウ 人間が原因となっている現代の生物絶滅がもたらす意味を、中学3年は理解しやすい。

エ 第27形式段落は「なか1～4」の共通する性質を述べた「まとめ」として、その役割が不十分である。

オ 第21～26形式段落は「なか1～3」に対する反論を想定しているが、具体的事例の一つと考えることができる。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1～3	一	はじめ（概要）	「生物の絶滅」
4～10	二	なか1（具体的事例1）	スピードと原因
11～14	三	なか2（具体的事例2）	「生態系」の仕組み
15～20	四	なか3（具体的事例3）	多大な恩恵
21～26	五	なか4（具体的事例4）	生態系の仕組みはたいへん複雑
27	六	まとめ（共通する性質）	生物の絶滅は不可逆的である

② 「幸福について」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2・3・4」「まとめ」「むすび」という構成の「論説」の文章である。

イ 「なか1～4」は三人の会話によって組み立てられている。会話は筆者が聞いた話の紹介という設定であるが、筆者の創作と考えられる。

ウ 寓話の要素があり、文学的な表現が多い。

エ 「議論の仕方のだいじな技術」を説明するには、これまでの議論の典型例を紹介した方が説得力がある。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1	一	はじめ（概要）	幸福について議論
2～5	二	なか1（具体的事例1）	問題を分けて一つずつ議論
6～7	三	なか2（具体的事例2）	議論の楽しさ
8～9	四	なか3（具体的事例3）	揺らいだ状態
10	五	なか4（具体的事例4）	二人に追及
11	六	まとめ（共通する性質）	自分の考えを深めていくことを楽しんだ
12	七	むすび（主張）	正しい考えを求める共同作業

③ 「何のために『働く』のか」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2」「まとめ」「むすび」という構成の「論説」の文章である。

イ 「はじめ」に「資産家の息子さん」のエピソードが示され、冗長である。

ウ 「なか1」は「ホームレスの男性」の例が実証的である。

エ 「なか2」では「美容師や理容師」「大学教師」の例が解説に止まっていて、筆者の説明が長い。

オ 「まとめ」と「むすび」が簡潔な書き方で明快である。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1～7	一	はじめ（概要）	「働く」ということの意味は何なのか
8～15	二	なか1（具体的事例1）	「アテンション（ねぎらいのまなざしを向けること）」
16～26	三	なか2（具体的事例2）	コミュニケーションの方法
27	四	まとめ（共通する性質）	アテンションを求めている
28	五	むすび（主張）	「自分が自分として生きるため」

④ 「いつものように新聞が届いた—メディアと東日本大震災」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2・3」「まとめ」という構成の「報告」の文章である。教科書の目次には「報道」と示されている。

イ 見出しが「伝えなくてはいけない」「一人一人の『三・一一』を思う」「地元生きる」「未来のために伝え続ける」とつけられ、組み立てが明確である。

ウ 「なか1」が「紙面制作の担当者」や、三名の記者、カメラマン、配達員の体験談が詳細に書かれている。

エ 「なか2・3」は典型的な例が一つずつ示されている。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1～2	一	はじめ（概要）	新聞が届いた
3～10	二	なか1（具体的事例1）	新聞は大切なライフラインの一つ
11～15	三	なか2（具体的事例2）	新聞の生命線は信頼性
16～26	四	なか3（具体的事例3）	地元紙の役割
27	五	まとめ（共通する性質）	最大の備えは「忘れないこと」

(2) 教育出版

① 「AIは哲学できるか」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2」「小まとめ」「なか3・4」「まとめ」「むすび」という構成の「論説」の文章である。

イ 「なか1・2」と「小まとめ」は帰納的に結びつき、整然としている。この部分を一つの具体的事例と考えることもできる。

ウ 「なか3・4」が筆者の説明や解説が中心で、例があるとよい。

エ 「なか4」とした「人工知能は哲学している」の形式段落が5行の記述で、ここは事例に基づいた書き方の方がよい。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1	一	はじめ（概要）	研究が、人工知能によって置きかえられていく可能性
2	二	なか1（具体的事例1）	過去の哲学者の思考パターンの発見
3	三	なか2（具体的事例2）	哲学的な思考パターンを可能なかぎり抽出
4	四	小まとめ（共通する性質）	哲学的思考パターンのほぼ完全なリスト
5、6	五	なか3（具体的事例3）	切実な哲学の問いを内発的に発することは起きない
7	六	なか4（具体的事例4）	「人工知能は哲学をしている」
8	七	まとめ（共通する性質）	人間という類の証しは、将来の人工知能によって陥落させられる
9	八	むすび（主張）	哲学に新次元

② 「async—同期しないこと」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2・3」「まとめ」「むすび」という構成の「論説」の文章である。

イ 「なか1」を具体的事例ではなく、「はじめ」と考えることもできる。

ウ 第5形式段落は「音を探し始めた」という筆者の体験が詳細に書かれている。

エ 第8形式段落でも「脳が見たいと思っているものだけ見てしまう」例が示されるとよい。

オ 「まとめ」と「むすび」は論理的に結びつき、力強いメッセージになっている。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1～3	一	なか1（具体的事例1）	津波をかぶった一台の「ピアノの死骸」に遭遇
4～7	二	なか2（具体的事例2）	音楽に加工される以前の音
8	三	なか3（具体的事例3）	視覚
9、10	四	まとめ（共通する性質）	同期しない音楽というのをつくる
11	五	むすび（主張）	不寛容な時代には、非同期、つまり同期しない音を聴くことが大切

③ 「問いかける言葉」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2・3・4」「まとめ・むすび」という構成の「論説」の文章である。

イ 筆者の経験に基づいて具体的事例が構成されている。

ウ 第13形式段落は考察と結論の両者の役割があり、二つの段落に分けるとよい。

エ「国連副事務総長にインタビューをする」写真が掲載されているが、「なか2・3」では筆者のインタビューの具体的な経験談の記述があるとよい。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1	一	はじめ（概要）	テレビの報道番組のキャスター
2、3	二	なか1（具体的事例1）	自分の考えを問われる
4～7	三	なか2（具体的事例2）	問いかける言葉は、同調の流れをせき止める
8～10	四	なか3（具体的事例3）	異質な世界との出会いをもたらす
11、12	五	なか4（具体的事例4）	日本の社会
13	六	まとめ（共通する性質）	閉じている世界を開いていく力がある
		むすび（主張）	異なる世界との出会いを生み出す

④ 「青春の歌—無名性の光」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2・3・4・5・6」という構成の「説明」の文章と捉えている。教科書の目次には「評論」と示されている。

イ 「なか」は短歌1から2首に対して、歌人である筆者が解釈を述べるという組み立てである。

ウ 筆者が複数の「青春の歌」を「無名性の光」という観点によって選び出している。筆者の読み方を示した、短歌の解説書になっている。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1	一	はじめ（概要）	青春という時間
2～7	二	なか1（具体的事例1）	「自転車一台分」
8、9	三	なか2（具体的事例2）	「まりもを見張る」
10、11	四	なか3（具体的事例3）	「互いしか知らぬジョークで笑い合う」
12	五	なか4（具体的事例4）	「思えよあの夏のわれら」
13～15	六	なか5（具体的事例5）	学生だった作者
16	七	なか6（具体的事例6）	「濃い夏の影」

(3) 光村図書

① 「作られた『物語』を超えて」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2・3」「小まとめ」「なか4・5・6」「まとめ」「むすび」という構成の「論説」の文章である。

イ 「なか2・3」はゴリラのドラミングの意味を一段落に一事項ずつ、詳細に説明している。

ウ 「なか2・3」と「小まとめ」では、複数の具体的事例とそれらに共通する性質が書かれていて、具体と抽象的概念の関係が明確である。

エ 段落の多くで冒頭にキーワードが置かれ、論理的文章の段落の書き方を熟知している。

オ 「なか5・6」は誤解に基づく「物語」が人間社会の悲劇をもたらすという内容が抽象的

に述べられているため、「なか5・6」はなくても、論説の文章として成り立っている。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1	一	はじめ（概要）	野生動物の行動を誤解
2、3	二	なか1（具体的事例1）	ゴリラ、ドラミング
4	三	なか2（具体的事例2）	二つの群れが出会ったとき
5	四	なか3（具体的事例3）	群れどうしが出会ったときばかりではない
6	五	小まとめ（共通する性質）	いろいろな意味
7	六	なか4（具体的事例4）	戦いの宣言と誤解
8	七	なか5（具体的事例5）	「物語」を作り、仲間に伝えたがる性質
9	八	なか6（具体的事例6）	「物語」は、人間の社会にも悲劇
10	九	まとめ（共通する性質）	自然や動物、人間自身を見る目が誤解に満ちている
11、12	十	むすび（主張）	作られた「物語」を超えて、真実を知る

② 「人工知能との未来」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2」「まとめ」「むすび」という構成の「論説」の文章である。

イ 見開き2ページの教材で、文章の全体像を把握しやすい。次の教材と比較しながら読むという単元の組み立てである。

ウ 「なか1・2」は段落の冒頭にキーワードが示され、具体的事例は分かりやすい書き方になっている。

エ 「まとめ」と「むすび」の区切れがはっきりせず、第5から8形式段落まで「むすび」と捉えることもできる。

オ 「まとめ」と「むすび」のキーセンテンスは取り出しにくく、この部分は筆者の連想によって、文章が展開している。

カ 棋士の経験に基づいた文章で、将棋の専門用語が使われていて、理解に時間を要する箇所がある。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1、2	一	はじめ（概要）	人工知能が社会に浸透し始めた
3	二	なか1（具体的事例1）	人工知能の思考は過程がブラックボックス
4	三	なか2（具体的事例2）	人工知能には「恐怖心がない」
5、6	四	まとめ（共通する性質）	選択肢を考えていくことが必要
7、8	五	むすび（主張）	人間と人工知能が共に生きる時代の、新しい関係

③ 「人間と人工知能と創造性」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2」「まとめ」「むすび」という構成の「論説」の文章である。

イ 前の教材に続き、見開き2ページで、文章の全体像を把握しやすい。前の教材と合わせて、比較しながら読むという単元構成である。

ウ 冒頭が冗長で、人工知能研究者としての立場や経緯を説明している。

エ 「なか1・2」で人工知能が人間より得意なこと、「なか3」で人工知能が苦手な分野を示しており、「まとめ」とよく結びついている。

オ 「はじめ」以外の形式段落は一段落一事項の記述となっている。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1～4	一	はじめ（概要）	人工知能と創造性の関係
5	二	なか1（具体的事例1）	一時間に十万作の小説を書く
6	三	なか2（具体的事例2）	偏りのないものをたくさん生み出す
7	四	なか3（具体的事例3）	コンピュータにはこの評価が難しい
8	五	まとめ（共通する性質）	人間とコンピュータは得意なことが異なる
9	六	むすび（主張）	評価の能力を伸ばす

④ 「誰かの代わりに」の特徴や文章構成

ア 「はじめ」「なか1・2・3・4」「まとめ」「むすび」とかりに分けたが、意味段落という単位で分けにくい、「論説」である。

イ 本教材は言葉によって言葉を説明するという演繹論理の思考法による文章である。一文一文の多くがつながり、文章を展開している。

ウ 抽象的で観念的な内容で一貫している。

エ 「一人の神学者」や「パンセ」といった引用が命題に近い。

段落		文章構成（段落の役割）	キーワード
形式	意味		
1、2	一	はじめ（概要）	「自分とは何か」
3	二	なか1（説明1）	自分が代わりのきかない存在であること
4、5	三	なか2（説明2）	受け身の存在
6、7	四	なか3（説明3）	「自立」
8～11	五	なか4（説明4）	「インターディペンデンス」（支え合い）
12、13	六	まとめ（共通する性質）	他の人たちと関わり合い、弱さを補い合う
14	七	むすび（主張）	人間の弱さ

8 大学生の論理的文章の構成表の作成

2023年度前期の本学、国語科教育法Aは、中・高等学校国語科の教員免許の取得を目指す大学3、4年39名（文学部日本文学科が20名、教育人間科学部教育学科が19名）が履修した。

(1) 第5回の授業「論理的文章を『読む』学習指導」

第5回の授業では以下の3項目を指導している。

- ① 論理的文章を「読む」学習指導の説明
- ② 中学1年「オオカミを見る目」の模擬授業
- ③ 「作られた『物語』を超えて」（中学3年、光村図書）と「スキマが育む都市の緑と生命のつ

ながり」(高等学校『新編現代の国語』東京書籍)の文章構成表等の作成

(2) 第5回「論理的文章を『読む』学習指導」その1

第5回は前述の「8(1)① 論理的文章を『読む』学習指導の説明」を学生が一斉に音読する。以下をプリントにして、学生に配布している。

① 論理的文章の種類

論理的文章はおおよそ「記録・報告・説明・論説」の4種類に分類することができる(各文種の説明は省略)。現在の中・高等学校国語教科書の教材を調べたところ、学年が進行するにつれ、「論説」が多くを占める。

② 学習目標、学習計画、学習事項

ア 学習目標

論理的文章を「読む」学習目標を「基礎」と「基本」に分け、次のように設定する。

- 基礎 i 文章を声に出し、正確に滑らかに読んでいる(音読)。
- 基本 ii 論理的文章の基本的な文章構成と段落の役割を理解している。
- iii 論理的文章を構成する段落からキーワードを取り出している。
- iv 論理的文章の事実の書き方に気づいている。

イ 学習計画

一つの単元の学習計画は2～5時間扱いとする。

第1次 全文を音読し、形式段落に番号をつける。(0.5～1時間)

第2次 いくつかの意味段落に分け、文章構成を確認する。(0.5～2時間)

第3次 意味段落のキーワードを取り出す。事実の書き方等を知る。(1～2時間)

ウ 学習事項

- i 文章構成を確認する。
- ii 段落の役割や効果を知る。
- iii 段落からキーワードを取り出す。
- iv 事実の書き方を学ぶ。
- v 論理的思考の組み立て(複数の具体的事例と考察の関係)や、具体と抽象的概念の関係に気づく。

(3) 第5回「論理的文章を『読む』学習指導」その2

① 中学1年「オオカミを見る目」の模擬授業

「オオカミが見る目」(中学1年、東京書籍)の模擬授業は学生が生徒役となり、50分で実施した。本教材の「学習目標、学習計画、学習事項」は前述の「8(2)②」のとおりである。本教材は「はじめ・なか1・なか2・まとめ・むすび」という基本的な構成をもつ「論説」の文章である。キーワードは意味段落の一つずつ存在し、取り出しやすい。

② 主な発問・指示

模擬授業の主な発問・指示を次に示す。山括弧内は学習の意義を、丸括弧内は学生に説明した学習内容を表している。

- 〔1 指示〕 先生が文章を読みます。読めない漢字には仮名を振りながら聞きましょう〈第1形式段落の範読〉(1分間に400字程度の速さで、淡々と読み、難語句も説明する)。
- 〔2 発問〕 読み方が分からない文字がありましたか〈読み方の確認〉。
- 〔3 指示〕 1段落をそろえて読みましょう。「皆さんは、……」ハイ(24秒)〈一斉音読〉(句読点は語句・文を見やすく区切る記号のため、音読では句読点で息継ぎをしないですらすると読む)。
- 〔4 指示〕 これからは皆さんだけでそろえて読みましょう。「これらは……」ハイ(42秒)〈第2から4形式段落の一斉音読〉(中学1年は範読をなくして、すぐに一斉音読を行えるが、学級の実態に応じて範読を入れる)。
- 〔5 指示〕 周りの人と話し合いながら、5から15段落を二つに分けましょう〈文章構成〉(具体的事例が書いてある段落を二つに分ける)。解答：5～10、11～15
- 〔6 発問〕 この文章の1から15段落は、次のような構成になります。1から4段落「はじめ」、5から10段落「なか1」、11から15段落「なか2」です。16段落と17段落の役割は何ですか〈段落の役割〉 解答：16段落「まとめ」(共通する性質) 17段落「むすび」(主張)
- 〔7 発問〕 この文章の話題は何か、1段落の言葉で言いましょう〈キーワードの抽出〉(「はじめ」のキーワードは探しにくいので、話題と言い換え、考え方を示す)。解答「オオカミ」
- 〔8 指示〕 5から10段落のキーワードをグループで話し合って、1番目の人が黒板に書きましょう〈キーワードの抽出〉(4人グループをつくり、1から4までの順番を決める)。解答「イメージが大きく違っていた」
- 〔9 指示〕 11から15段落のキーワードをグループで話し合って、2番目の人が黒板に書きましょう〈キーワードの抽出〉。解答「イメージがすっかり変化」
- 〔10 指示〕 16段落のキーワードをグループで話し合って、3番目の人が黒板に書きましょう〈キーワードの抽出〉。解答「野生動物に対する考え方」
- 〔11 指示〕 17段落のキーワードをグループで話し合って、4番目の人が黒板に書きましょう〈キーワードの抽出〉。解答「社会の状況」
- 〔12 指示〕 「オオカミを見る目」の模擬授業をはじめ、今日の授業の感想を発表しましょう。一人30秒ぐらいです。Aさんから、どうぞ〈感想の話し合い〉。
- 〔13 指示〕 黒板に書いてあることをノートに丁寧に書き写しましょう〈ノートの書き方〉。

(4) 第5回「論理的文章を『読む』学習指導」その3

「オオカミを見る目」の模擬授業後、教材の特徴と文章構成をプリントで配布する。その後「作られた『物語』を超えて」と「スキマが育む都市の緑と生命のつながり」の文章構成表を自分で作成するように伝える。学生に対して、教材の考察や文章構成表の作成が教材研究の出発点となると説明している。

9 大学生の作成した論理的文章の構成表

前述の「8(4)」の課題は履修学生39名中36名の提出である。学生が作成した「スキマが育む都市の緑と生命のつながり」(『新編現代の国語』東京書籍)の文章構成と人数は以下のとおりである。授業者が想定した文章構成「はじめ・なか1・2・3・4・5・まとめ・むすび」と一致する表はなかった。

(1) 学生が作成した文章構成

- ① 「はじめ・なか1・2・まとめ・むすび」27名
- ② 「はじめ・なか1・2・まとめ」2名
- ③ 「はじめ・なか1・2・まとめ・おわり」1名
- ④ 「はじめ・なか1・2・3・まとめ」1名
- ⑤ 「はじめ・なか1・2・3・まとめ・むすび」4名
- ⑥ 「はじめ・なか1・2・3・4・まとめ・むすび」1名

(2) 考察

学生の多くは授業者が示した「オオカミを見る目」の「はじめ・なか1・2・まとめ・むすび」という基本的な文章構成を、他教材に熟考せずに、当てはめたと考えられる。「作られた『物語』を超えて」は中学3年の教材ではあるが、「はじめ・なか1・2・3・小まとめ・なか4・5・6・まとめ・むすび」と入り組んだ構成である。そのためか、学生が作成した構成表は「スキマが育む都市の緑と生命のつながり」に比べ一層粗かった。

学生が作成した構成表から、論理的文章を一定の型に入れる傾向があることが分かった。学生の多くは構成に対する捉え方が大雑把で、具体と抽象的概念の関係をあまり考慮していないようである。

10 論理的文章の形式を簡潔に学習する

ここまで国語科教育法の授業や学生が作成した論理的文章の構成表から、中学校国語科の論理的文章を「読むこと」の授業を検討してきた。学生の多くは授業者が模擬授業を行った教材の文章構成の特徴を他教材にも当てはめて、具体や抽象的概念の関係を一定の型に組み入れる傾向がある。これは中・高等学校国語科の学習の結果とみることもできる。今後、論理的文章を「読むこと」では、文章の形式を重視した簡潔な学習指導の提案が益々必要であると考えている。

「注」

- 1、デュルケーム、菊谷和宏訳(2018)『社会学的方法の規準』講談社学術文庫、50 - 64.
- 2、田中克彦(1981)『ことばと国家』岩波新書、21.
- 3、ピアジェ、滝沢武久訳(1968)『思考の心理学』みすず書房、127.

- 4、森岡健二 (1963) 『文章構成法』 至文堂、394 - 399.
- 5、田中潔 (1983) 『実用的な科学論文の書き方』 裳華房、8 - 9.
- 6、小熊英二 (2022) 『基礎からわかる 論文の書き方』 講談社現代新書、39 - 55.
- 7、渡邊雅子 (2021) 『「論理的思考」の社会的構築-フランスの思考表現スタイルと言葉の教育』 岩波書店、19 - 23.
- 8、野矢茂樹 (2006) 『入門! 論理学』 中公新書、21.